

名古屋都市センター研究成果

平成21年度の研究の概要をご紹介します。
なお、研究報告書は名古屋都市センターのまちづくりライブラリーで、
概要版はホームページでご覧いただけます。

<http://www.nui.or.jp>

自主研究

研究
テーマ

名古屋プロジェクト診断2010 ～名古屋のまちづくりを振り返る～

名古屋都市センター 上席調査研究統括監 羽根田英樹

本調査は、名古屋市において実施され、おおむね20年を経過した都市計画・まちづくりに関わる計画、制度、事業に焦点をあて、どのような意図で構想・計画され、その後の市街地形成にどのような影響を及ぼしたかなどについて、多角的な視座から検討して課題を浮き彫りにし、今後のまちづくりに生かすことを目的としたものである。

調査の対象は名古屋まちづくりのエポックとなったもので、都市景観基本計画、名駅地下街開発、金山地区の開発、志段味ヒューマン・サイエンス・タウン、建築協定制度、基幹バスなど総計26プロジェクト。当初目的の達成状況、経済活動と物的計画とのかかわり、プロジェクト地区とその周辺とのかかわり、コミュニティとの協働などに関する課題が浮かび上がってきた。

研究
テーマ

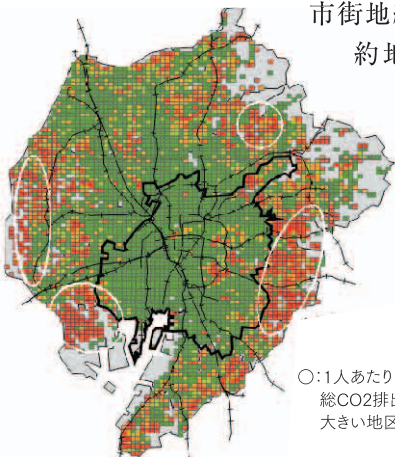
名古屋都市圏における エコ・コンパクトな市街地形成

名古屋都市センター 調査課 河村幸宏

少子高齢化、人口減少、地球温暖化、厳しい財政制約などから、持続可能な都市を実現しうる空間構造として、コンパクトシティが目ざされている。そこで、名古屋大学と共同で「持続可能性評価システム」を構築し、環境負荷、市街地維持費用、QOL(生活の質)の3つの視点から、2050年の名古屋都市圏の市街地の評価を行った。

その結果、①名古屋近郊の駅周辺の拠点地区はQOLが高く、1人あたりCO2排出量及び市街地維持費用が小さいため、集約地区に適している。②郊外の公共交通空白地域や、西南部地域などの自然災害危険地区はQOLが低く、1人あたりのCO2排出量及び市街地維持費用が大きい。という結果が得られ、コンパクトシティの有効性が確認された。

●図 1人あたり総CO2排出量



○:1人あたり
総CO2排出量の
大きい地区

研究
テーマ

自転車走行空間における 利用者ストレス

名古屋都市センター 調査課 井村美里

名古屋市内の自転車走行空間は、コリドー路線、車道、自転車歩行者専用道等様々あり、都心部には新たに自転車道も整備されつつある。本来、自転車利用者が走行空間をどう評価し、何にどの程度ストレスを感じているかを把握した上で整備を進めるべきだが、これまで、利用者感覚で走りにくいと評価し合うことはあっても、それを客観的に評価することはなかった。

この調査では都心部の選定路線を走行後、その路線の走りやすさの総合評価、走行幅員・路面状況・進行を妨げる減速要因・自動車等に対する恐怖感の程度を聞くストレスチェックアンケートを行い、回答結果から走行空間を客観的指標で評価し、歩道・車道・自転車用通行部の条件別にストレス傾向をまとめている。

研究
テーマ

中川運河の再生に向けた活動報告

名古屋都市センター 調査課 音堅清人

中川運河は、物流形態の変化により水運利用が低下し、水面利用が少ない状態となっています。本研究では、中川運河再生に向けた市民参加イベントを実施しました。中川運河水上フェスティバルでは、カヌー、ドラゴンボート、ゴンドラ、観光遊覧などの体験乗船を行ないました。

イベント参加者に中川運河で今後希望するイベントや施設整備についてアンケート調査を実施しました。イベントでは、水上スポーツ、水上レジャー、観光遊覧と水辺を活かしたイベントの希望が多く、施設整備では、遊歩道、緑地、水上レジャー施設と水辺で憩える施設の希望が多いことがわかりました。



中川運河水上フェスティバル(カヌー教室)

水上スポーツ、水上レジャー、観光遊覧と水辺を活かしたイベントの希望が多く、施設整備では、遊歩道、緑地、水上レジャー施設と水辺で憩える施設の希望が多いことがわかりました。

名古屋市住宅供給公社の一戸建分譲住宅 シティハイツ志段味IV 平成23年1月新発売

●所在地/名古屋市守山区大字下志段味生下り地内他
●交通/ゆとりーとライン(ガイドウェイバス)「荒田」停
徒歩約6分●敷地面積/約163~224㎡●建物面積約
116~135㎡●譲渡価額/未定



お問合せ先/名古屋市住宅供給公社 事業課 ☎0120-714-794

(H22.11.15現在)